

ペトルス・ラムス (1515-1572) 研究の現状

—— Walter J. Ong 以前、以後 ——

久保田 静香

はじめに

近世初期に、教育者、哲学者（論理学者）、雄弁家としてヨーロッパ全域で絶大な影響力をもったペトルス・ラムスとその最大の協力者であるオメール・タロンの著作は、1550年から1650年までの間で1100の版を数えたと言われる¹。加えてラムスは版を重ねるたびに自著に手を入れる傾向があったため、エディションごとに少しずつ、あるいは大幅に内容が異なるといった事態を引き起こしており、こうした事情が長らくラムスの著作と思想の全体像を極めて捉えにくくする大きな原因となっていた。「ラムス研究に意義ある貢献をしたいと望む者は誰でも、移動とマイクロフィルムのために大きな予算が必要となる」とは、イギリスを代表するラムス研究者 P. Mack が20世紀の終わりに発した言葉である²。21世紀に入って10数年を経たいまではラムスのテキストも電子化が進み、この場にいながらにして、かつては閲覧困難であったテキストにも容易にアクセスできるようになったが、インターネットの普及以前に、ラムスの膨大で把握しがたいこうした著作群に対して初めて真正面から向き合ったのが、アメリカの Walter J. Ong (1912-2003) であった。1958年に刊行された『ラムスとタロンの著作目録』³は、Ong が欧米の194の図書館を訪問してラムスとタロンの著作の所在を調べあげ、1番から757番まで通し番号をつけてリストアップした、文字通りの著作目録である。この『目録』と同時刊行された『ラムス、方法、そして対話の衰退』⁴は、ラムス研究に「革命」⁵をもたらしたとまで言われる。Ong の研究の何が

¹ Walter J. ONG, S. J., *Ramus, Method and the Decay of Dialogue. From the Art of Discourse to the Art of Reason*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1958 (1983), p. 5.

² Peter MACK, «Aglicola and the Early Versions of Ramus's Dialectic», in *Autour de Ramus. Texte, théorie, commentaire*, Kees MEERHOFF et Jean-Claude MOISAN (éds.), Québec, Nuit Blanche, 1997, p. 7.

³ Walter J. ONG, S. J., *Ramus and Talon Inventory. A short-title inventory on the published works of Peter Ramus (1515-1572) and of Omer Talon (ca. 1510-1562) in their original and variously altered forms. With related material: I. The Ramist controversies: A descriptive catalogue. 2. Agricola Check list: a short-title inventory of some printed editions and printed compendia of Rudolph Agricola's Dialectical Invention (De Inventione Dialectica)*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1958. 本目録の正式タイトルはこのとおり非常に長いもので、「ルネサンス期の長いタイトルを思い出させるやり方だ」との評価あり：Peter SHARRATT, «The Present State of Studies on Ramus», in *Studi Francesi*, n° 47-48, 1972, p. 203.

⁴ W. J. ONG, S. J., *Ramus, Method and the Decay of Dialogue*, op. cit., 1958.

⁵ Peter SHARRATT, «Recent Work on Peter Ramus (1970-1986)», in *Rhetorica: a Journal of the History of Rhetoric*, Vol. 5, No. 1, Winter 1987, p. 8.

それほどまでに画期的だったのか。その「革命」は後にいかなる評価を受けたのか。本稿ではこの Ong の研究を分水嶺と位置づけ、2014 年現在に至るまでのラムス研究史を概観してみたい。なお、英文では、2000 年までに公刊されたラムス研究文献についての P. Sharratt による詳細なレポートがすでに存在する⁶。そのため本稿においては Sharratt のような網羅的な文献のリストアップとそれへのコメントといったかたちは控え、ラムス研究史において特にインパクトのあった文献に焦点をあわせることで、これまでにいかなるテーマがいかにして深められてきたかを辿り、最終的に、現在ではどのような問題意識が主流となって研究が遂行されているかを報告することとしたい。

1. W. J. Ong までのラムス研究（～ 1958）

Ong の研究は、先立つ二つの潮流への挑戦としての側面があった。第一の潮流として、1930 年代に顕著となったアングロ・サクソン文化圏におけるラムス研究の隆盛がある。1936 年のハーヴァード大学創立 300 周年を受け、S. E. Morison が『ハーヴァード・カレッジの創立』と『17 世紀のハーヴァード』を、その 3 年後には Morison の弟子の P. Miller が『ニュー・イングランドの精神— 17 世紀—』を刊行し、アメリカにおけるラムス研究の先鞭をつけたのである⁷。それ以前、アメリカの学界ではラムスはほぼ無名の存在だった。Morison と Miller は長らく忘れ去られていたラムス主義を、アメリカ的知性の形成初期において深く関与した哲学的伝統であったとして再発見し、高く評価したのである。彼らの著作においてラムス主義は、聖バルテルミ虐殺で横死したプロテスタントの英雄の思想として、ピューリタニズムの簡明質素な文体・様式への嗜好、および単純志向をよしとする善きピューリタンの徳性に見事にかなうものと大いにもてはやされている。Miller の著作から一節を引こう。「ニュー・イングランドの人びとの知的生活にかかわる基本的事実は、彼らがはっきりとラムス主義者の旗印の下に加わったということである。逍遙学派の学説は確かに読まれてはいたが、ラムス主義のほうは信用を得て、ニュー・イングランドの思想形成に決定的な役割をはたした。アウグスティヌスやカルヴァンはピューリタニズムの起源として広く認知されているが、この二人の神学者同様、ニュー・イングランドのピューリタンたちに対してはペトルス・ラムスの論理学が多大なる影響を及ぼしたのである」⁸。

これとちょうど同じころイギリスでは、エリザベス朝（1558-1603）とジャコビアン時代

⁶ Peter SHARRATT, «The Present State of Studies on Ramus», *art. cit.*, 1972, pp. 201-213 ; id. «Recent Work on Peter Ramus (1970-1986)», *art. cit.*, 1987, pp. 7-58; id. «Ramus 2000», in *Rhetorica: a Journal of the History of Rhetoric*, Vol. 18, No. 4, Autumn 2000, pp. 399-455.

⁷ Eliot Samuel MORISON, *The Founding of Harvard College*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1935; id., *Harvard College in the Seventeenth Century*, 2 vols., Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1936 (とりわけ «VIII. Grammar, Rhetoric and Logic», pp. 169-193); Perry MILLER, *The New England Mind. The Seventeenth Century*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1939.

⁸ P. MILLER, *The New England Mind*, *op. cit.*, p. 116.

(1603-1625) のイギリス文学におけるラムス主義の流行に注目した H. Craig の『魔法のグラス—文学におけるエリザベス朝精神—』⁹ が出ている。Craig によれば、単純な方法と実用主義にもとづき、哲学（論理学＝ディアレクティック）と雄弁（レトリック）の結合の理念のもとに敢行されたラムスの学芸改革は、ウィリアム・テンプル（1555-1627）¹⁰ やフィリップ・シドニー（1554-1586）などの熱烈な支持を受け、その精神は、エドモンド・スペンサー（ca. 1552-1599）、ロバート・グリーン（1558-1592）、ガブリエル・ハーヴェイ（ca. 1552-1631）らの文学実践にも流れ込んでいるのだという。

こうして 20 世紀の前半、アングロ・サクソン圏の知的伝統の水脈を辿ろうとする試みがラムス礼賛の言辞とともに始まり、その後 20 年間の英語圏の人文学研究はラムスという新機軸を得て急速な進展をみせた。たとえばそこには、ラムスと形而上学詩人、ラムスとシェイクスピア、ラムスとミルトン、ラムスとホップズ、ラムス主義とジョン・ウェスレーのメソジスト派など¹¹、否応もなく目を引く主題が続々と居並ぶことになるだろう。なお、H. Hotson はこの 20 世紀前半のアングロ・サクソン圏でのラムス研究の流行について、「英語圏のラムス主義は、本質的に英語圏のピューリタニズムの補完役 adjunct である」として、「英語圏の歴史家たちは、自国の発展過程を大陸側の文脈に位置づけることを伝統的によしとせず」、「ピューリタニズム同様、ラムス主義を自給のもの、つまりはアングロ・サクソン圏固有の現象とみなすことに悦に入っていたのだ」¹² と辛辣な評価を下している。

Ong が挑戦の対象とした第二の潮流は、19 世紀のイギリス系フランス人研究者 Ch. Waddington (1819-1914) が打ち出したものである。Waddington が 1855 年に刊行した『ラムス—その生、著作、見解—』¹³ は、毀誉褒貶相半ばしながらも、現在に至るまで広く流布するラムスの人物像の描出に決定的な役割をはたした。とりわけフランス語圏におけるこの著作の影響力は絶大であった。Waddington は 19 世紀半ばのフランスにおける唯一のプロテスタントの哲学教授であり¹⁴、近代的「国民国家」形成の機運の高まりとともにナショナリズムが高揚する時代の申し子でもあった。彼の著作に対しては、フランス＝ケルト文化の純正さを謳う当時の愛国

⁹ Hardin CRAIG, *The Enchanted Glass. The Elizabethan Mind in Literature*, Oxford, Basil Blackwell, 1935.

¹⁰ 17 世紀の同名人物で外交官・文人であったサー・ウィリアム・テンプル（1628-1699）の祖父。岸本広司「サー・ウィリアム・テンプルの家系」、『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第 143 号、2010 年、61-71 頁。テンプルのラムス主義への傾倒ぶりが窺える記述あり。

¹¹ W. J. ONG, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue*, op. cit., 1958 (1983), p. 6.

¹² Howard HOTSON, *Commonplace Learning, Ramism and Its German Ramifications 1543-1630*, New York, Oxford University Press, 2007, p. 3.

¹³ Charles WADDINGTON, *Ramus (Pierre de La Ramée), sa vie, ses écrits et ses opinions*, Paris, Librairie de Ch. Meyrueis et Ce éditeur, 1855.

¹⁴ Kees MEERHOFF, «Petrus Ramus and the Vernacular», in *Ramus, Pedagogy and the Liberal Arts. Ramism in Britain and the Wider World*, Steven J. REID and Emma Annette WILSON (eds.), Surrey (United Kingdom), Ashgate, 2011, p. 134.

イデオロギーに見合うよう 1572 年のラムスの死をことさらに英雄的に描き出そうとするあまり、随所で事実のロマン主義的歪曲がみられるとの根強い批判がある¹⁵。その一方で、ここでしか得られない貴重な情報も多々含まれているとの一定の評価もある¹⁶。

上述の二大潮流はいずれもラムス礼賛とラムスの英雄視によって特徴づけられるが、欧米の図書館を渉猟して可能なかぎり多くのラムス著作に自らあたった Ong の目には、それらはいずれも民族主義的イデオロギーに満ち満ちた、確たる証拠にもとづかない憶説にすぎないものと映ったのだった。実際、ルネサンス期の教育的・知的伝統の正確な理解を妨げるものとして Ong は、第一にラテン語に精通する者が減り続けていること、第二に 19 世紀の国民文学推進運動をあげている¹⁷。要するに、先代の研究者が国民文学に肩入れしてラテン語文化の消滅を早めたことへの恨みが Ong の研究の根幹にあったと言える。そしてそれは、19 世紀ナショナリズムの煽りを受けて不当に誇張されて流布した「ラムス神話」を打ち砕くことへと彼を強く駆り立てたのである。

ラムス研究の金字塔として聳え立つ 1958 年の彼の 2 冊の研究書は、よく見るとあからさまなほど Waddington への当てつけととれる作りとなっている。たとえば Waddington の『ラムス』の表紙には、ヴォルテールの『哲学辞典』(1764) にみられるラムス礼賛の文章が銘句としておかれている¹⁸のに対し、Ong の『ラムス、方法、そして対話の衰退』タイトルページには、ラムスに批判的であったユストゥス・リプシウスの書簡から、「若者よ、聞きたまえ。ラムスが偉大な人間だったと思う限り、君はけっして偉大な人間にはならないだろう」¹⁹という一節が引かれている。また、Waddington のほうは全 480 頁のうち 397 頁までがラムスの伝記に費やされているが、Ong は伝記を全 408 頁のうちの 19 頁にとどめ、Waddington による「ラムス英雄伝」の戯画化を狙っているかのように、ラムスを「肉体なき亡霊」²⁰として描き出す。そして何より Ong の『ラムスとタロンの著作目録』は、Waddington の著作巻末につけられた「ラムス著作カタログ」²¹の不備を正すことを第一の目的として作成されたものであったことを忘れてはならない。Waddington のカタログについて、Ong は「概略的で不十分なだけでなく、極めて不正確で

¹⁵ この Waddington 批判の急先鋒に立ったのが Ong である。

¹⁶ P. SHARRATT, «The Present State of Studies on Ramus», *op. cit.*, 1972, p. 201.

¹⁷ W. J. ONG, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue*, *op. cit.*, 1958 (1983), p. 10.

¹⁸ «La Ramée, bon philosophe dans un temps où l'on ne pouvait guère en compter que trois, homme vertueux dans un siècle de crimes, homme aimable dans la société et même, si l'on veut, bel esprit. Voltaire.», Ch. WADDINGTON, *Ramus*, *op. cit.*, 1855, couverture. ヴォルテールの原文とは若干異なっている。

¹⁹ «Young man, listen to me : You will never be a great man if you think that Ramus was a great man. — Justus Lipsius, *Misc. Letters*, 89.», W. J. ONG, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue*, *op. cit.*, 1958 (1983), title page.

²⁰ H. HOTSON, *Commonplace Learning*, *op. cit.*, 2007, p. 10.

²¹ Ch. WADDINGTON, *Ramus*, *op. cit.*, 1855, «Catalogue des écrits de Ramus», pp. 441-477.

しばしば誤っている」²²と序論で一刀両断に切り捨てている。続けて、これまでまともな著作目録がなかったせいでラムス主義に関するまともな研究がなされ得なかったのだと深い嘆きを顕わにしている。

このように Ong の先行研究批判はすぐれて文献学的見地に立ってなされたものなのである。それではその研究によってラムスの思想と実践は、はたして適切に描き出されるにいたったのだろうか。事実はそこからほど遠く、逆に彼によってラムスは不当に貶められてしまった面がある。ラムスに対する否定的見解は、Ong の著作の前書きや導入部において早くも散見される。「ラムスは偉大な知識人ではなく、広い関心をもった学識者なのであり、その最も目につく姿勢は、表面的には革命的だが、根本ではまったく独創性に欠くというものだ」²³という棘のある言葉や、「ラムス主義論理学は、彼の学問的観点からすると真面目な論理学者の興味をほとんど引かないように、インテレクチュアル・ヒストリーとの関連性は、形式論理学の分野においてはまず残されていない。それは敬うべき理論ではなく、一揃いの精神的習慣であることを確証している。ラムスはアリストテレスでもブールでもフレイゲでもない。(中略)彼はデカルトでさえもないのだ」²⁴との断言を前に、読者は少なからず当惑させられることだろう。明らかにこれはラムス主義の伝統を批判するために書かれている。それにしてもなぜ批判なのか²⁵。

ペーパーバック版『ラムス、方法、そして対話の衰退』に寄せられた著者の前書きによれば、そもそもこの研究は「1940年代後半に抱いたある直感」²⁶から生まれたものなのだという。「フランス・ルネサンス期の人文主義者・哲学者のピエール・ド・ラ・ラメー(中略)によってあれほどの情熱をもって唱導された知性の<改革>が、古代・中世世界から近代世界への移行をもたらす意識における主要な変化を、何らかのかたちで書き留めていたという直感」²⁷だという。より具体的には、「印刷術が思考の視覚的組織化とテキスト化に対して以前には知られていなかった力を与えたこと、(中略)そして知識を談話から切り離し、それをほとんどモノローグ的な環境においたこと」²⁸、こうしたことがラムス主義の一連の改革を特徴づけるものなのというのが、1940年代当時、マーシャル・マクルーハン(1911-1980)のもとで研鑽を積んでいた若き Ong の直感であった。後に文学理論を学ぶ学徒にとって必読の書ともはやされることになる『声の文化と文字の文化』(1982)²⁹を貫く近代批判の基調テーマが、すでにこの段階で芽生えていたわけであ

²² W. J. ONG, *Ramus and Talon Inventory*, op. cit., 1958, p. 2.

²³ W. J. ONG, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue*, op. cit., 1958 (1983), p. ix.

²⁴ *Ibid.*, p. 7

²⁵ Ong のラムス主義批判の根底には、彼がイエズス会神父であることも関係しているのではないかと見る向きもある：K. MEERHOFF, «Petrus Ramus and the Vernacular», art. cit., 2011, p. 134.

²⁶ W. J. ONG, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue*, op. cit., 1983, p. viii.

²⁷ *Ibid.*

²⁸ *Ibid.*

²⁹ Walter J. ONG, *Orality and literacy. The Technologizing of the Word*, London, Methuen, 1982. W. J. オング『声の文

る。したがって、Ong によってラムス研究は多少なりともこの「直感」を裏づけするためにまず遂行されたものであることがわかる。ここで再び H. Hotson の言葉を引く。「文化的变化のパロメーターとしてのラムス主義の重要性について、これほど強い主張をした者はこれまでに (Ong をおいて他には) いなかった。だが、1572 年の聖バルテルミ虐殺の日以来、これほどの時間と手間と学識とレトリカルな表現技法をもってして、ラムスの哲学的・教育的遺産を貶めることに精力を注いだ者もまたいなかった。(中略) Waddington によって崇敬された殉教者 martyr としてのラムスと、Ong によって描出された気狂いじみた者 madman としてのラムスの間で選択を強いられ、半世紀にわたってラムス主義の研究に携わった学徒らはラムス自身をよけて舵をとり、Ong が目論んだとおりに、ラムスを“ありふれた伝統の中心 the anonymous center of tradition”に置き去りにしたのだ」³⁰。Ong のラムス研究書は、前述の『ニュー・イングランドの精神』の執筆者である P. Miller 教授の指導下で、1954 年、ハーヴァード大学に博士学位請求論文として提出されたものである (学位取得は 1955 年)。それまで Miller 教授のもとで近世英米文学におけるラムス主義の影響をより具体的に見定めようとしていた学生たちのラムス熱は、このいささか挑発的な論文によって水を差された格好となったのだった。

なお、Ong の二著作が刊行された 1958 年には、R. Hooykaas による『人文主義、科学、そして改革、ピエール・ド・ラ・ラメー (1515-1572)』³¹ も上梓されている。Ong のインパクトがあまりに強かったせいで、Hooykaas のほうはその陰に隠れてしまったが、ラムスにおける自然科学と数学の問題をめぐる研究の嚆矢として高い評価を得ている。ヴィヴェス、ケプラー、ベーコン、パラケルススとの比較や、ラムスと数学研究に携わった同僚たちの情報が充実している³²。

2. P. Rossi と F. Yates の記憶術研究を経て (1957-1986)

Ong の研究に前後して、ラムスを直接の主要な研究対象とするのではなく、個別のテーマに焦点を絞った思想史研究においてラムスに多くの紙幅を割く研究者が現れる。その筆頭が P.

化と文字の文化』桜井直文、林正寛、糟谷啓介訳、藤原書店、1991 年。

³⁰ H. HOTSON, *Commonplace Learning*, op. cit., 2007, p. 12. カッコ内補足筆者。「The anonymous center of tradition」とは、Ong が自著で小見出しとして用いている表現: W. J. ONG, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue*, op. cit., 1958 (1985), p. 7.

³¹ Reijer HOOYKAAS, *Humanisme, Science et Réforme, Pierre de la Ramée (1515-1572)*, Leide, Brill, 1958.

³² この研究を受けてオランダ語で次の研究書が書かれた: Johannes Jacobus VERDONK, *Petrus Ramus en de wijskunde*, Assen, Van Gorcum, 1966. この内容の詳細なレジュメが P. SHARRATT, «The Present State of Studies on Ramus», art. cit., 1972, pp. 205-207 で読める。ラムスの数学研究については他に、Peter SHARRAT, «La Ramée's Early Mathematical Teaching», in *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, 1966, pp. 605-614; Jean-Claude MARGOLIN, «L'Enseignement des mathématiques en France (1540-1570): Charles de Bovelles, Fine, Peletier, Ramus», in *French Renaissance Studies 1540-1570, Humanism and the Encyclopedia*, Edinburgh University Press, 1976; Isabelle PANTIN, «Ramus et l'enseignement des mathématiques», in *Ramus et l'université*, Éditions Rue d'Ulm, Presses de l'École normale supérieure, 2004, pp. 71-86 などがある。

Rossi と F. A. Yates である。Rossi は 1957 年、『フランシス・ベーコン—魔術から科学へ』の第 4 章から第 6 章において³³、ベーコン (1561-1626) とラムスの思想的影響関係を探る考察を展開している。アリストテレスの「オルガノン」に代わる新しい論理学体系として『ノヴム・オルガヌム』(1620) を世に問うたベーコン思想に、ラムスの反アリストテレス主義がいかに作用しているかを見届けようとした Rossi の意図は、「いかにベーコンの科学的認識が、ルネサンスの弁証術的・弁論術的伝統に負っているか、そしていかに多くのかれの科学的理論が弁論術の分野から移植されたものであるかを明らかにすること」³⁴であった。1570 年以降、ケンブリッジ大学ではラムス主義論理学が旋風を巻き起こしていたが、当時そのケンブリッジに在籍していたベーコンもラムスを読んでいてにちがいないとの見立てのもと、Rossi は、ベーコンがラムスを非難しながらも、ある程度その用語や諸概念を踏襲していると述べる。たとえばベーコンにおいて「言語」は「人間性そのものにとって不可欠だが、人間と世界の間に入り込んで、実在の真の理解を妨げる傾向がある」³⁵として批判的な扱いがなされており、その当然の帰結としてベーコンの方法論は世界と事物に関する「多様性の認識」³⁶に支えられることになるが、そもそもそれはラムスの「単一にして唯一の方法」への反論としての意味合いもあるのだという。とはいえ「ラムスの理論に対するベーコンの親近性は明らか」³⁷であり、特にラムスの二分法を批判しながら、ベーコンが自身の著作でそれを採用することがある点に Rossi は注目し、ベーコン思想における根強いラムス主義の痕跡を追及し続ける。

Rossi はこのあと 1960 年に『普遍の鍵』を出版し、記憶術の伝統におけるラムス主義の役割に一章を割く³⁸。これを受けて F. Yates は 1966 年に『記憶術』³⁹を刊行する。Rossi と Yates の研究に共通するのは、ラムスにおいて「記憶」の問題は実用目的の技術として理論化されたのではなく、あくまで「論理学の一部門」として位置づけられているという認識である。ラムス主義の改

³³ Paolo ROSSI, *Francesco Bacone : Dalla magia alla scienza*, Bari, Laterza, 1957. パオロ・ロッシ『魔術から科学へ』前田達郎訳、みすず書房、1999 年、とりわけ、第 4 章「論理学・弁論術・方法」、第 5 章「言語とコミュニケーション」、第 6 章「弁論術的伝統と科学の方法」、171-271 頁。ベーコンとラムスをめぐる邦文文献には、前田達郎「レトリックと方法—F. ベーコンの二つの顔—」『新岩波講座 哲学 15』、1985 年、63-98 頁がある。

³⁴ ロッシ『魔術から科学へ』前田訳、前掲書、236 頁。

³⁵ 同書、210 頁。

³⁶ 同書、214 頁。

³⁷ 同書、238 頁。

³⁸ Paolo ROSSI, *Clavis universalis. Arti mnemoniche e logica combinatoria da Lullo a Leibniz*, Milano-Napoli, Riccardo Ricciardi, 1960. パオロ・ロッシ『普遍の鍵—ルルスからライプニッツにいたる記憶術と結合論理学—』清瀬卓訳、国書刊行会、1984 年、とりわけ第 V 章「人工記憶と新しい論理学—ド・ラ・ラメー、ベーコン、デカルト—」、185-239 頁。

³⁹ Frances A. YATES, *The Art of Memory*, Routledge & Kegan Paul, 1966. フランセス A. イエイツ『記憶術』玉泉八州男監訳、水声社、1993 年、とりわけ第 10 章「記憶術としてのラムス主義」、273-384 頁、及び第 12 章「ブルーノ記憶術とラムス記憶術の衝突」、311-312 頁。

革方針によれば、古典レトリックの発想部門、配置部門、記憶部門はいずれも精神の作用に関わるものとして、ディアレクティック＝論理学の構成要素とみなされる。ただし、教授法を改革して簡素化するというラムス主義の目的に照らすなら、改革されたディアレクティック＝新しい論理学そのものが「すべての主題を記憶する良質で新しい手段を提供する」場とならなければいけないわけであり、その結果、記憶部門に関する理論的考察はラムス主義においては排除されることとなるのである。言い換えれば、ラムス主義においては記憶術が新しい論理学そのもののなかに吸収されてしまうということであり、また逆に言えば、人間たちから記憶のための負担を減らすことこそが、ラムスらの最大の関心事であったということにもなるだろう。そのうえで Rossi は、ラムスらが記憶術に対してとったこの立場——「記憶の一助という理論を論理学や方法論のより普遍的な枠組みのなかへ吸収していく方向」——を、論理学の歴史における「ラディカルな転換点」とみなし、やがてその方向にペーコン、デカルト、ライプニッツも動いていくのだと結論づけている⁴⁰。

それに対して Yates のほうは、ラムスに先立つ記憶術の伝統（とりわけルルス主義）、及び、ラムスと同時代に考案された記憶術（とりわけジョルダノー・ブルーノのそれ）との比較考察に力点を置いている。Yates によれば、ラムスは「(場とイメージを用いる伝統的記憶術は) 人為的につくりあげた外面的な記号やイメージを用いるが、自分 [= ラムス] の場合は、自然なやり方で構成の各部分をたどる」⁴¹ と自らの試みの正当性を主張しているのだという。ここで言われる「自然なやり方」とは「イメージを用いない弁証法的序列が、人間の精神にとって真に自然な序列である」⁴² とする見方にもとづくものである。そして Yates は、このいわば偶像破壊的なラムスの思想が「カルヴァン主義神学とうまく連動したに違いない」⁴³ と看破するのである。ところで、ラムス主義に対する Yates の評価そのものは非常に低い。ラムス主義を「いささか皮相な教育方法」⁴⁴ と断じ、ルルス主義との比較においては「論理と記憶の基盤を宇宙の構造に置くという試みに関してみれば、ラムス主義はルル(ス)主義の深遠さに比べて児童に類するほど浅薄なもの」⁴⁵ とにべもない。また Yates は Ong をときおり好意的に参照するが、彼との見解の相違もまた次のように明確に表明する。「オングが指摘しているように、順序だてて配列された摘要がページに印刷され、その摘要に基づいて記憶することは、それ自体、事物を空間的に表象化する一面を備えている。(中略) ただ私がオングと見解を異にするとと思われるところは、記憶の際、こういった形で事物を空間的に表象化することを、彼が、印刷本の登場によってもたらされた新たな発展と捉えている点である。しかし私にはむしろ、印刷されたラムスの摘要は、手稿本に視覚的に

⁴⁰ ロッシ『普遍の鍵』清瀬訳、前掲書、195頁。

⁴¹ イエイツ『記憶術』玉泉監訳、前掲書、278頁。かっこ内補足筆者。

⁴² 同書、279頁。

⁴³ 同上。

⁴⁴ 同書、277頁。

⁴⁵ 同書、280頁。

配列され、図式化されていた構図を印刷本に移しかえたものであるように思われるのだ」⁴⁶。Yates がこのように Ong の研究の発表後まもなくして、その主張の根幹部分に異を唱えていたことは注目に値しよう。

なお 1957 年から 1986 年にかけては、ラムス（主義）にまとまったページを割いた思想史・教育史関連の研究書として主に次のようなものがある。E. Garin の『ヨーロッパの教育』（1957）⁴⁷ ではラムスのテキストの引用とともにラムスが目指した自由学芸改革の要点が述べられ、N. W. Gilbert の『ルネサンスの方法概念』（1960）では古代ギリシア以来の方法概念の変遷の歴史においてラムスの「単一の方法」の意義を明らかにすることが目指され⁴⁸、C. Vasoli の 656 頁におよぶ大著『人文主義のディアレクティックとレトリック』（1968）⁴⁹ においては 15・16 世紀の人文主義文化の歴史的文脈にラムスの思想と改革（とりわけディアレクティックとレトリックおよび方法概念をめぐるもの）を正確に位置づけようとしている。また、A. Graffon と L. Jardine の『人文主義から人文学へ』（1986）⁵⁰ では、ラムスらによる学芸改革が人文主義的学問を「世俗化」していく過程（学芸が人々にとって社会的地位を得るために必要な手段として位置づけられる過程）を描き出している。

他方でこれと同じ時期、フランス語によるラムス研究には目ぼしいものが見あたらない。しいて言えば、フランスの研究者の間ではそのころラムス主義者とプレイヤッド派詩人との関係の解明に主たる関心が向けられていたのだが⁵¹、それらの研究はいずれも、プレイヤッド派がラムスらの理論を歓迎して熱心にとりいれた——あるいはその逆——という、検証不十分な前提から脱せずにいるものであった。しかし、現在ではもはやラムス主義者とプレイヤッド派詩人との親密さや理論上の類縁関係が素朴に説かれることはなくなり、むしろ両者が目指していたところの

⁴⁶ 同書、276 頁。

⁴⁷ Eugenio GARIN, *L'Educazione in Europa 1400-1600*, Bari, Laterza, 1957. エウジェニオ・ガレン『ヨーロッパの教育』近藤恒一訳、サイマル出版会、1974 年、185-189 頁。

⁴⁸ Neal W. GILBERT, *Renaissance Concepts of Method*, New York, London, Columbia University Press, 1960, pp. 123-163.

⁴⁹ Cesare VASOLI, *La Dialettica e la retorica dell'umanesimo: "Invenzione" e "Metodo" nella cultura del XV e XVI secolo*, Milano, Feltrinelli, 1968, pp. 333-601.

⁵⁰ Antony GRAFTON & Lisa JARDINE, *From Humanism to the Humanities. Education and the Liberal Arts in Fifteenth and Sixteenth Century Europe*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1986, pp. 161-200.

⁵¹ Michel DASSONVILLE, «La collaboration de la Pléiade à la *Dialectique* de Pierre de La Ramée (1555)», in *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, Tome 25, 1963, pp. 337-348; Alex. L. GORDON, *Ronsard et la rhétorique*, Genève, Droz, 1970; Marcel RAYMOND, *La Poésie Française et le Maniérisme 1546-1610*, Genève, Droz, 1971. 英語圏では Graham CASTOR, *Pléiade Poetics*, Cambridge University Press, 1964; Robert GRIFFIN, *Coronation of the Poet. Joachim Du Bellay's Debt to the Trivium*, University of California Press, 1969; Roy E. LEAKE, «Antoine Fouquelin and the Pléiade», in *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, t. 32, 1970, pp. 379-394.

相違を指摘する研究のほうが信頼を得ている⁵²。

3. N. Bruyère (1984) と K. Meerhoff (1986) による Ong 批判

皮肉にもラムスが愛した母国フランスでの不毛な研究状況が長らく続く中、1980年代半ば、突如としてフランス語圏研究者の目覚ましい活躍がそれまでのラムス研究を一変させる。つまり、30年近くほとんど Ong の独擅場であったラムス研究が、ここで初めて大きな方向転換を余儀なくされるのである。それを可能にしたのが N. Bruyère と K. Meerhoff の二人であった。

Bruyère は『ラ・ラメーの著作における方法とディアレクティック』⁵³の冒頭から Ong への対決姿勢を鮮明にする。『目録』を信用し切って、オング自身とその追随者たちは不十分で誤ったテキスト・データから出発していた。オングによるラ・ラメーの諸版の分類は、それらを年代順に並べただけのものであり、オングはテキストの変遷を指摘してはいるが、著作諸版の真の系図を作成しようとは決してしなかった⁵⁴と手厳しい。Bruyère の目指すところは、複雑に入り組んだラムス著作の諸版に自らあたり、それらの関係を整理して「真の系図」を作成したうえで、ラムスのディアレクティックと方法理論の特質をより正確かつ明瞭に示すことであった。実際 Bruyère はフランス全国の図書館を回り、Ong の『目録』から抜け落ちていたさまざまな版の情報を追加して出版している⁵⁵。以下、Bruyère の研究にもとづきラムス主義ディアレクティックの構成と変容の過程を整理する。

ラムスとタロンによるディアレクティック関連の著作は非常に数が多く、その変遷過程も複雑を極めているが、Bruyère によれば全部で 53 版あるディアレクティック著作群は大きく 4 種類に分類することができる。一つ目は「ラムス主義ディアレクティックの理論書」、二つ目はタロンによる注釈のつけられた「ディアレクティック講義」、三つ目は「反アリストテレス論」に属する著作群、四つ目はラムス主義の「方法に関する理論的考察」を含むテキスト群である。

まずは一つ目の「ディアレクティック理論書」についてであるが、これに属する著作は全部で 21 版を数え、このうち明白に内容が異なるものと認識できるものは 9 種類だと Bruyère は指摘する（本稿末尾の「補足資料 1」でタイトル冒頭に (1) の番号つき）。年代順に見ていくと、1543

⁵² Kees MEERHOFF, «Antoine Fouquelin et Thomas Sébillet», in *Nouvelle revue du seizième siècle*, n° 5, 1987, pp. 59-77. Meerhoff が出した結論（プレイヤッド派詩論とラムス主義レトリック理論の間に直接的な影響関係はないとする）を評価するものとして、Francis GOYET (éd.), *Traité de poétique et de rhétorique de la Renaissance*, Paris, Librairie Générale Française, 1990, p. 419; Joachim DU BELLAY, *La Deffence, et Illustration de la langue françoise* (1549), édition et dossier critique par Jean-Charles MONFERRAN, Genève, Droz, 2001, p. 29.

⁵³ Nelly BRUYÈRE, *Méthode et dialectique dans l'œuvre de La Ramée. Renaissance et âge classique*, Paris, J. Vrin, 1984.

⁵⁴ *Ibid.*, p. I.

⁵⁵ Nelly BRUYÈRE, «Le fonds Pierre de La Ramée des Bibliothèques de France», in *Nouvelles de la République des Lettres*, n° 6, 1986, pp. 71-97.

年前半の『ディアレクティックの分類』と題された手稿本⁵⁶と印刷本⁵⁷、続いて1543年9月刊行の『ディアレクティックの訓練』⁵⁸、1546年の『オメール・タロンによるディアレクティックへの3種の注解』⁵⁹、1554年の『ディアレクティックの訓練 全3巻』⁶⁰、1555年のフランス語版『ディアレクティック』⁶¹、その後10年を隔てて1565年に『ディアレクティック第1巻、発想について』⁶²、1572年の『ディアレクティック 全2巻』⁶³、そしてラムスの死後の1576年に刊行されたフランス語版『ディアレクティック』⁶⁴がそれにあたる。この9種類のうち、まず重要なものとして注目すべきが1543年9月刊行の『ディアレクティックの訓練』である。これは『反アリストテレス論』⁶⁵と同時刊行されたものだが、2冊ともにスコラ学とアリストテレス論理学への冒瀆的な批判が見られたため、パリ大学のスコラ学者たちの強い反発を引き起こして高等法院にまで訴えられることになる。時の国王フランソワ1世がことの収拾のためにこれに介入し、1544年の勅令によって問題の2冊は発禁処分とされ、加えてラムスは哲学とディアレクティックの講義までも禁止される。その後のラムス主義者とスコラ学者の間の激しい論争はこの2冊の刊行が引き金となった。1546年にタロンの名を冠して出されたディアレクティック書は、1544年の勅令によって哲学・ディアレクティック講義を禁じられていたラムスが、タロンの名を借りて自身の思想を披露したものであるということで研究者の意見は一致している。1547年にフランソワ1世が亡くなるとラムスの庇護者であったロレーヌ枢機卿が新国王アンリ2世に進言したおかげで44年の勅令が廃止され、1551年にはラムスがコレージュ・ロワイヤル教授に就任する中、1555年、彼は自らの名を堂々と表に出してフランス語版『ディアレクティック』を刊行する。これは初めてフランス語で書かれた哲学書（論理学書）であると評されたり、プレイヤッド派詩人たちの大幅な協力を得て書かれていたりといった点で、近代以降、ラムス著作のなかでは最も有名となったが、そういった外面的な点だけでなく、内容面でも、これ以前のラテン語版ディアレクティック理論書では「I. 自然 *natura*」「II. 学理 *doctrina*」「III. 実践 *exercitatio*」の3巻構成で書かれていたのが、「I. 発想 *invention*」と「II. 判断 *jugement*」の2巻構成に変更されているという特徴がある。

以上の「ディアレクティック理論書」に対し、タロンの注釈つき「ディアレクティック講義」に属するテキストがある。これは全部で14版あるうち、内容の異なるものは4種類とされてい

⁵⁶ Petrus Ramus, *Dialecticae partitiones*, 1543 [Manuscrit 6659 BnF].

⁵⁷ Petrus Ramus, *Dialecticae partitiones*, Paris, J. Bogard, 1543.

⁵⁸ Petrus Ramus, *Dialecticae institutiones*, Paris, J. Bogard, 1543 (septembre).

⁵⁹ *Dialecticae commentarii tres authore Audomaro Taleo*, Paris, L. Grandin, 1546.

⁶⁰ Omer Talon, *Institutionum dialecticarum libri tres*, Paris, L. Grandin, 1554.

⁶¹ Pierre de La Ramée, *Dialectique*, Paris, André Wechel, 1555.

⁶² Petrus Ramus, *Dialecticae liber primus, de inventione*, Paris, André Wechel, 1565.

⁶³ Petrus Ramus (?), *Dialectica libri duo*, Paris, André Wechel, 1572.

⁶⁴ Petrus Ramus (?), *Dialectique*, Paris, André Wechel, 1576.

⁶⁵ Petrus Ramus, *Aristotelicae Animadversiones*, Paris, J. Bogard, 1543 (septembre).

る（「補足資料1」のタイトル冒頭に(2)の番号つき）。年代順には、最初に1550年版『ディアレクティックの訓練（オメール・タロンの卓越した講義による）全3巻』⁶⁶、次に1556年版『ディアレクティック（オメール・タロンの卓越した講義による）全2巻』⁶⁷、その10年後の1566年に同名著書⁶⁸、最後に1569年にも同タイトルでの刊行⁶⁹がある。このうち最もよく参照されるのが1556年版で、前年に出たフランス語版『ディアレクティック』を忠実にラテン語に翻訳した本文テキストにタロンが注釈を施したものとして価値が置かれている。

続いて「反アリストテレス論」関連著作に移る。これには全部で11版あるうち4種類の異なる版があるとされている（「補足資料1」のタイトル冒頭に(3)の番号つき）。該当するのは、1543年9月の『反アリストテレス論』⁷⁰（1544年のフランソワ1世勅令で発禁処分となる）、1548年の『反アリストテレス論 全20巻』⁷¹、1556年の同名著書⁷²、そして1569年の『ディアレクティック講義 全20巻』⁷³である。ところで、この「反アリストテレス論」に属する著作群を生み出す過程で、後のラムス主義の「方法」に関する理論の洗練が図られていくという事情があり、これらの「方法理論」に関する著作は連動させて見ていく必要がある（「補足資料1」のタイトル冒頭に(4)の番号つき）。たとえば1543年9月版『反アリストテレス論』ではアリストテレス『分析論後書』への言及があるのだが、そこにおいてすでに「方法」に関する考察が芽生えており、1548年版でははっきりと「方法」とその「単一性」に関する考察が展開されるようになる。また、この1548年版から分量が大幅に増えて全20巻構成となり、以後はアリストテレスの「オルガノン」全巻を全面参照して書かれていくことになる。1556年版も20巻構成だが全部で700頁を超す大部の著作となっている。これはさらに複数の巻ごとにまとめて3つの束に分けられており、このうちの2つ目の束に収められている第9巻と第10巻が翌年の1557年に『樹立されるべき学問の方法が単一であること』⁷⁴と題されて単独出版の運びとなる。これがラムス主義の方法に関する理論書の核になるものとして特別に重視されているものである。この方法理論は、このあとに出る1566年と1569年のそれぞれの版で修正が加えられながら、いつそう錬磨されていくことになる。

以上が Bruyère によって再整理されたラムス主義のディアレクティックと方法理論に関する著

⁶⁶ *Institutionum dialecticarum libri tres Automarii Talaei praelectionibus illustrati*, Paris, M. David, 1550.

⁶⁷ *Dialecticae libri duo Audomari Talaei praelectionibus illustrati*, Paris, André Wechel, 1556.

⁶⁸ *Dialecticae libri duo Audomari Talaei praelectionibus illustrati*, Paris, André Wechel, 1566.

⁶⁹ *Dialecticae libri duo Audomari Talaei praelectionibus illustrati*, Paris, André Wechel, 1569.

⁷⁰ Petrus Ramus, *Aristotelicae animadversiones*, op. cit., 1543 (septembre).

⁷¹ Petrus Ramus, *Animadversionum Aristotelicarum libri viginti*, Paris, J. Roigny, 1548.

⁷² Petrus Ramus, *Animadversionum Aristotelicarum libri XX*, Paris, André Wechel, 1556.

⁷³ Petrus Ramus, *Scholarum dialecticarum libri XX*, Bâle, E. Episcopius, 1569.

⁷⁴ Petrus Ramus, *Quod sit unica doctrinae instituendae methodus : locus e nono Animadversionum*, Paris, André Wechel, 1557.

作の変遷過程である。無論 Bruyère の研究も鵜呑みにすることはできないが、こうして一通りの見取り図を描くことで、たがいに似通った膨大な著作群の間に仮のかたちでも目印をつけることができる。ここでひとつの有力な叩き台が提示されたと考えるべきだろう。

一方、Meerhoff のほうは、ラムス主義レトリックの研究で他の追従を許さないほどの大きな成果をあげた。1986 年刊の『16 世紀フランスにおけるレトリックとポエティック』⁷⁵で、彼は Bruyère をはるかに凌ぐかたちで Ong を激しく非難する。同著第 3 部「ラムス主義レトリックの変遷」に付された序論の書き出しは次のようなものである。「ピエール・ド・ラ・ラメーの膨大な著作はそれに値する注目を受けたことがこれまでになかった。(中略) イエズス会の学識者である Walter J. Ong は自分が少なくとも 10 年をかけて研究することとなった人物の作品と人柄を前に苛立ちを隠さない。その研究書のタイトル『ラムス、方法、そして対話の衰退』は、そうしたどちらかというと敵意を含んだ態度を証明するものとなっている。W. Ong がラ・ラメーの著作に突き止めたと思いついている主要な欠点は、知と言説の<空間化>と<幾何学化>の傾向である。ラムスがしばしば用いる二元論的図式化が、生きた発話の忘却と、<我と汝 Ich und Du>の間のコミュニケーションの軽視を、つまりは 1950 年代の実存主義的キリスト者たちの間で至上の価値をもつとみなされていたものの完全なる拒否をもたらしたというのだ。(中略) Ong によれば、口演 *actio* に関するラムス主義の理論は非常にわずかなものに還元される。措辞 *elocutio* の理論はもっぱら転義 *tropes* と文彩 *figures* の一覧表を含むのみとなるのだ」⁷⁶。このように畳みかけるようにして Ong の研究の概略を述べる Meerhoff の言葉の中にもまた、この「イエズス会士の学識者」への苛立ちが滲み出ている。Meerhoff による苛烈な Ong 批判とラムス主義レトリック著作の詳細な分析については、他所ですでに概略を紹介したためそちらを参照されたい⁷⁷。ここではそれ以外に Meerhoff が、ラムス主義レトリックを修辞理論と単純に同一視することにも警鐘を鳴らしていることに注目しておきたい。これはレトリックの役割を文の装飾機能に特化したものと捉える近代以降の傾向——フランスの構造主義批評家ジェラルド・ジュネットによる「制限されたレトリック」なるフレーズのもとに人口に膾炙するもの——の端緒にラムス主義レトリックをおこうとするものであるが、そうした見方はとりわけ W. S. Howell⁷⁸ や Ong の研究によって先導されて広まったところがある。それに対して Meerhoff は次のような異議申し立てをおこなう。そもそもラムス主義ディアレクティック自体が古典レトリックのあり方を見直すなかで構築され得たものであり、そこにはルドルフ・アグリコラ以来の人文主義的伝統も大きく関与している以上、むしろレトリックがディアレクティックのなかに深く浸透していることのほ

⁷⁵ Kees MEERHOFF, *Rhétorique et poétique au XVI^e siècle en France. Du Bellay, Ramus et les autres*, Leiden, J. Brill, 1986.

⁷⁶ *Ibid.*, p. 175.

⁷⁷ 久保田静香「ラムス主義レトリックとデカルト—近世フランスにおける自由学芸改革の一側面—」『エクフラシス—ヨーロッパ文化研究—』第 4 号、早稲田大学ヨーロッパ中世ルネサンス研究所、2014 年、68-70 頁。

⁷⁸ Wilbur S. HOWELL, *Logic and Rhetoric in England 1500-1700*, New York, Princeton University Press, 1957.

うを重視すべきなのだと⁷⁹。

4. 共同研究の時代（1986 年以降）から H. Hotson（2007）を経て

Bruyère と Meerhoff の後、2000 年の初めまでは、一人の研究者がラムス主義に関する大部の専門書をもつというよりも、学術誌や論文集を通じてこれまで検証が不十分なままだった個別のテーマを掘り下げるという姿勢が主流となる。その流れの中で、まずは 1986 年にフランスの老舗学術誌 *Revue des sciences philosophiques et théologiques*⁸⁰ で、1991 年にはベルギーの学術誌 *Argumentation* でラムス特集号が組まれ⁸¹、そして 1997 年には「ラムス主義研究国際ネットワーク Réseau International d'Études Ramistes」の後援による第一弾論文集『ラムスをめぐって—テクスト、理論、論評—』⁸² が刊行され、続けて 1998 年の国際シンポジウムにもとづき『ペトルス・ラムスの影響』⁸³ が 2001 年に公刊される⁸⁴。この間に出了 1992 年の C. B. Schmitt と B. Copenhaver による『ルネサンス哲学』第 4 章中の「ペトルス・ラムスの単純な方法とその先駆者たち」⁸⁵、および 1999 年刊の『近代ヨーロッパにおけるレトリックの歴史』所収の M. Magnien による論文「ある死から、別の死—再考されたレトリック 1536-1572—」⁸⁶ も、それぞれ哲学史とレトリック史の広い文脈にラムス主義を適切に位置づけようとしたものとして評価が高い。さらに 2004 年には『ラムスと大学』⁸⁷ が、2005 年には『ラムスをめぐって—論争—』⁸⁸ が上梓される。これらの論集に見られる執筆者や編纂者の名から、このころのラムス研究では Meerhoff が名実ともに第一線に

⁷⁹ Kees MEERHOFF, «Beauty and Beast” : Nature, Logic and Literature in Ramus», in *The Influence of Petrus Ramus*, Mordechai FEINGOLD, Joseph S. FREEDMAN and Wolfgang ROTHER (eds), Basel, Schwabe & Co Ag, 2001, pp. 200-214. 同じ主張が P. Mack にも見られる : P. MACK, «Ramus and Ramism : Rhetoric and Dialectic», in *Ramus, Pedagogy and the Liberal Arts*, op. cit., 2011, p. 8.

⁸⁰ *Revue des sciences philosophiques et théologiques*, «Pierre de La Ramée (Ramus)», Tome 70, 1986.

⁸¹ *Argumentation: an international journal of reasoning*, Volume 5, Issue 4, 1991.

⁸² *Autour de Ramus. Texte, théorie, commentaire*, op. cit., 1997.

⁸³ *The Influence of Petrus Ramus*, op. cit., 2001.

⁸⁴ 以上に挙げた学術誌の特集号と論文集に寄せられた個々の論文の内容については P. SHARRATT がそれぞれ概要をまとめてくれている。P. SHARRATT, «Ramus 2000», art. cit., 2000.

⁸⁵ Charles B. SCHMITT, Brian P. COPENHAVER, *Renaissance Philosophy*, Oxford University Press, 1992. チャールズ・B・シュミット、ブライアン・P・コーペンヘイヴァー著『ルネサンス哲学』榎本武文訳、平凡社、2003 年、230-242 頁。

⁸⁶ Michel MAGNIEN, «D'une mort, l'autre (1536-1572) : la rhétorique reconsidérée», in *Histoire de la rhétorique dans l'Europe moderne 1450-1950*, Marc FUMAROLI (éd.), Paris, P.U.F., 1999, pp. 341-409. エラスムスの死 (1536 年) からラムスの死 (1572 年) の期間を扱っている。

⁸⁷ *Ramus et l'université*, Kees MEERHOFF et Michel MAGNIEN (éds.), Paris, Éditions d'Ulm, 2004.

⁸⁸ *Autour de Ramus. Le combat, études réunies et présentées par Kees MEERHOFF et Jean-Claude MOISAN avec la collaboration de Michel MAGNIEN*, Paris, H. Champion, 2005. 「ラムス主義研究国際ネットワーク」後援による第二弾論文集。

立っていることがわかる。彼は常に Ong の向うを張った議論を展開するのだが、興味深いことに 1997 年の論文集のエピグラフには次のような言葉が刻まれている。「ラムス主義研究国際ネットワークの仕事の最初の成果であるこの論文集は、現代ラムス主義研究の創始者たる Walter J. Ong 神父と Peter Sharratt の著作に敬意 *hommage* を表するものとしたい」。これは Meerhoff 流の皮肉でもあろうが、同時にこの二人の貢献がなければ現在のようなラムス研究の進展はありえなかったとの感慨も込められているのだろう。このころになるとどの論考も Ong の研究に対しては慎重であったり、批判的であったり、あるいは意識的に参照を控えたりと、多かれ少なかれ距離をとったものとなるが、そうしたなかであえて Ong を支持する態度を鮮明にした研究も現れる。上記 2001 年刊行の論文集に収められた M. Feingold による「イギリスのラムス主義—再解釈—」⁸⁹ である。

Feingold は Ong の描く 16 世紀後半から 17 世にかけてのイギリスの状況を「非常に正確だ *quite accurate*」⁹⁰ と述べる。Ong は当時のイギリスの知的社会へのラムス主義の浸透について、ちょうどそのころ青年期にあった詩人や文学者たちを中心とした未熟な段階のものにすぎず、ラムス主義によって導かれた学問には真剣で成熟したものはなかったと主張していたが、Feingold はそれに賛同するというのである。もとより Feingold の先行研究への疑念は、「ラムス主義」という言葉に対する正確な定義づけが不十分なままだったことに大きく由来している。たとえばラムス主義の牙城とも言われたケンブリッジ大学に 16 世紀後半在籍していた学生たちの蔵書目録中、ラムスとタロンの著作はあってもわずかで、むしろアリストテレス、キケロ、ヘルモゲネス、トマス・アクィナスなどのほうが数において優っている点を鑑みただけでも通説の信憑性は弱まると述べる。また、ラムスに対してはその死後プロテスタントの殉教者としてのイメージが強まり、イギリスのピューリタンたちは彼を表向きには崇敬せざるを得ない状況にあったため、史料として残る「ラムス主義者」と呼ばれる人々の数々の言葉を頭から信じることは危険だとも警告する。さらに Feingold は Bruyère の研究をも手放しで称賛することはない。近世初期のラムスの読者たちは誰も Bruyère のような網羅的で緻密な読み方などしていない以上、その当時のラムス主義の受容を見定めるには、Bruyère のアプローチはむしろ不適切なのではないかと疑義を呈する。実のところ、Bruyère の研究成果に忠実であろうとすると、かえって A. Robinet の『デカルト精神の源泉へ』(1996)⁹¹ のようなこじつけの類縁性にもとづく誤った思想の系譜を作りあげることにもなるのだと釘をさす。

⁸⁹ Mordechai FEINGOLD, «English Ramism: A Reinterpretation», in *The Influence of Petrus Ramus*, op. cit., 2001, pp. 127-176.

⁹⁰ *Ibid.*, p. 128.

⁹¹ André ROBINET, *Aux sources de l'esprit cartésien. L'axe La Ramée-Descartes : De la Dialectique de 1555 aux Regulae*, Paris, J. Vrin, 1996. 本著は 1990 年代に刊行された唯一のラムス研究書(デカルトとの思想的類縁性を探ったもの)なのだが、残念ながら概ね評価は低い。Frédéric de BUZON, «Mathématique et dialectique : Descartes ramiste ?», in *Les études philosophiques*, n° 75, 2005, pp. 455-467 にも A. Robinet に対する厳しい批判が見られる。

一方、2000年以降の単著のラムス研究書としてはまず、2002年に出版されたJ. V. Skalnikの『ラムスと改革』⁹²がある。本書の目指すところは1855年に刊行されたWaddingtonの『ラムス』に代わる新たなラムス伝を編むことであつた。まずSkalnikはWaddingtonの著作を「その古さにもかかわらず、いまだにラムスの最良の伝記であり続けている」と評価しながら、それが「ロマン主義的な英雄崇拜と啓蒙主義的な進歩と理性への盲信の混ざり合い」にもとづくものであつたことを認める。とはいえWaddingtonを酷評してラムスを貶める際の「Ongの極端な言葉遣い」もまたSkalnikは忌避する。Ongの見方に拠っているのは、なぜラムス主義が16世紀後半から17世紀にかけてあれだけの人気を博したのか、あまつさえ教養人たちにも広く受け入れられたのかの説明できないと指摘する。ラムス主義の大々的な広がり理由を明らかにするには、ラムスが生きた時代の社会的・経済的・政治的特質あるいは当時の支配的イデオロギーに十分に配慮した考察が必要なのだと。こうした問題意識のもと、Skalnikは「ラムスは典型的なイデオロギストだ」⁹³と言明する。貧しい少年期を送ったラムスの学芸改革イデオロギーは、生まれではなく、才能と学力にもとづく実力主義の社会の実現を理想としており、単純さと低廉さと即効性を旨とする彼の教育方法は、下層階級に生まれたものでも社会的上昇の機会が得られることを目指して考案されたものだったとみなすのである。このSkalnikの議論は1986年のGraftonとJardineによる『人文主義から人文学へ』にみられた学芸の「世俗化」の議論を下敷きにしたものであると言えるが、Skalnikは16世紀フランスを前半期と後半期に切り分け、フランソワ1世治世下の前半期は広い層に対して社会的上昇の機会が開かれていた時期であるとし（ラムスはたちまちに出世する）、逆にフランソワ1世が没してから後半期は社会的な混乱とともに上層階級の人々の硬直化と排他的施策が始まった時期であるとして（一転してラムスは苦境に立たされる）、いささか図式的にすぎる見方を打ち出している。結果的にこの研究書自体が、ある種のイデオロギーに誘導されている面を否定できないのだが（カール・マルクスの名を出すことも辞さない）、このSkalnikの説が、その5年後に出版されて大きな反響を呼ぶことになるH. Hotsonの研究に大きな影響を与えるのである。

2007年に刊行された『コモンプレイス・ラーニングーラムス主義とそのドイツにおける普及1543-1630一』⁹⁴において、Hotsonはまずそれまでのラムス主義研究を振り返り、それが主に英語圏の研究者たちによって先導されてきたことに不満を隠さない。著者によれば、ラムス主義の影響という観点から言えば、イギリスやアメリカ以上に、ドイツにおいてこそそれが広く熱烈に受け入れられたという事実があるにもかかわらず、17世紀以来、ドイツの学者はラムス主義にほとんど関心を示すことがなかった。そこには19世紀から20世紀にかけて台頭したナショナリ

⁹² James Veazie SKALNIK, *Ramus and Reform. University and Church at the End of the Renaissance*, Kirkville, Missouri, Truman State University Press, 2002.

⁹³ *Ibid.*, p. 8.

⁹⁴ H. HOTSON, *Commonplace Learning. Ramism and its German Ramifications 1543-1630*, op. cit., 2007.

ズムに牽引された歴史研究のあり方が関係しているという。つまり、領邦国家体制の形成によって分裂し政治的混乱を極めた近世初期のドイツの状況を不名誉なものとする見方が長らく優勢で、そこでは、ラムスによって改革されたディアレクティックが、当時数多く設立された小規模の教育機関に浸透していったということこそが、かつてのドイツの嘆かわしい分裂状況を象徴する出来事なのだとし、その具体的経緯を直視することが避けられてきた側面があるのだという⁹⁵。したがって Hotson は、これまで歴史的に空白なまま放置されてきた部分の記述を自ら引き受けたのであり、それは、半世紀以上前にすでに Ong によって「ドイツこそがラムス主義の真の苗床なのだ」⁹⁶と言われながらも、ほぼ手つかずのままにおかれていた仕事であった。この意味で Hotson のこの研究は、Ong が提示した課題に対するひとつの解答であり、また Ong 流のアプローチに対するひとつの態度表明でもあった。というのも、本稿においてすでに何度か引き合いに出した Hotson の言葉からおのずと知られるように、彼は Ong の極端なラムス観を鵜呑みにすることは決してない。ときに Ong を茶化すかのような筆致を見せながら、その問題意識の根幹には先の Skalnik 同様、ラムス主義の学芸改革がオリジナリティに欠く皮相な試みだと言うなら、なぜこれほどまでに、とりわけドイツで好意的に受け入れられたのかという疑問がある。

この疑問の解明のため、Hotson は自著を3部構成とし、ほぼ時系列に沿って、第1部ではドイツの歴史的文脈を汲みながら初期のラムス主義が北西ドイツに浸透する過程を描き出し、第2部ではドイツの改革派アカデミーにおいて半ラムス主義 *semi-ramism* ——バルトロメオ・ケッケルマン (ca. 1572-1608) に代表される——が果たした役割に焦点をあて、第3部ではケッケルマンの弟子のヨハン・ハインリヒ・アルシュテート (1588-1638) による『百学連環 *Encyclopaedia*』(初版 1620 年刊)を中心に、1630 年ごろまでのラムス主義思想の変容と発展のいきさつを丹念に辿る。16 世紀後半から 17 世紀の初めにかけてラムス主義が盛んとなったのはヨーロッパの辺境地域であり、政治的に分裂していた中央ヨーロッパであり、北西ドイツの小都市であったのだが、そうした当時のドイツにおけるラムス主義の目覚ましい台頭に力を注いだのは、Ong の言うような新しい印刷術の広まりではなく、あくまで社会的・政治的事情であったことが浮き彫りにされる。その事情とは、迅速かつ効率的で費用のかからないラムス主義的な教育システムは、ヨーロッパ辺境地域の若者たちに対して社会的・経済的・職業的な上昇の機会を与えるために必要とされたというものである⁹⁷。こうしたかたちでのラムス主義の浸透を横目に、ユストゥス・リプシウスは真の知恵の消滅を憂え、Ong は対話の衰退を嘆いた。しかしラムス主義は同時に、増大する新たな社会層間での知識の伝達を合理化し、重苦しい古代の伝統への服従

⁹⁵ *Ibid.*, pp. 13-14.

⁹⁶ W. J. ONG, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue*, *op. cit.*, 1958 (1983), p. 298.

⁹⁷ これは 2002 年の Skalnik と同じ主張である。Hotson は Skalnik の『ラムスと改革』を「ラムス自身に関する今後の研究にとって出発点となるべき優れた著作だ」と称賛している。H. HOTSON, *Commonplace Learning*, *op. cit.*, 2007, p. 13, note 31.

から近世初期の人びとの精神を解放するものでもあったというのが Hotson の出した結論であった⁹⁸。なお、2011 年に出た論文集『ラムス、教授法と自由学芸』⁹⁹では、この Hotson の「革新的な著作 groundbreaking work」¹⁰⁰の路線に従うものだと明言されている。同時に Ong や Feingold のようなラムスとラムス主義に対するネガティブな受け止め方からは距離をおくものであることもまた示唆しながら、イギリス、スコットランド、アイルランドはもとより、アイスランドやハンガリーといったそれまで未開拓であった地域におけるラムス主義の広がりについても新たな知見をもたらすものと謳われている。

おわりに

以上が 2014 年現在までのラムス研究の進展のあらましである。ここからわかることは、Ong の研究の影響力の圧倒的な大きさである。20 世紀前半まで近代特有の民族主義的イデオロギーに突き動かされてラムスを都合よく自国文化の顕揚に用いる趨勢があり、それに強く異を唱えたのが Ong であった。しかしその Ong もまた近代批判のイデオロギーに傾きすぎたきらいがあり、1980 年代半ばの Bruyère と Meerhoff の文献学的実証研究によりその不足が大幅に補われ、乗り越えられたかのように見えた。しかしながら、2000 年を超えてもなお Feingold のようにあえて Ong を支持する側に回る者もあり、また、近年最も画期的と高評価された 2007 年の Hotson の研究においても、さらには 2011 年の最新論文集においてさえも、Ong の研究とどう向き合うかがまず表明されるという状況には驚くほかない。

確かに現在、ラムスの著作の電子化は進んだ。しかしながら、半世紀以上前、自らの足で欧米の図書館を巡り歩いて作成された Ong の『ラムスとタロンの著作目録』に勝るものはいまもない。この『目録』に見られるいくらかの不備は、もとより後続の者が補っていくべきものなのであろう¹⁰¹。そうした中で日本におけるラムス研究は、今日にいたるまで本格的なものは出されていないのが現状である¹⁰²。本稿でこれまでの研究状況を一通り概観したのち気づかされたのは、そこには常に多くの罣が潜んでおり、中立的な立場からラムス主義の思想と実践を公正に評価することがいかに困難であるかということであった。おそらく現在の私たちの目に親しいラムス像の多くは、19 世紀以降に顕著となった欧米のナショナリズムの高揚の中で多少とも歪めて伝えられたものなのであろう。ラムス研究に携わる者は常に、ラムスにまつわる多くの俗説をまず振り払う作業から始めなくてはならないのである。

⁹⁸ *Ibid.*, pp. 293-294.

⁹⁹ *Ramus, Pedagogy and the Liberal Arts. Ramism in Britain and the Wider World*, op. cit., 2011. この論文集は 2008 年に開催されたラムス主義を主題とする国際学会の内容にもとづいて編纂されたものである。

¹⁰⁰ *Ibid.*, p. 2.

¹⁰¹ 本稿末尾の「補足資料 2」に、20 世紀以降に刊行されたラムスとラムス主義者の著作の復刻版および校訂版・翻訳版をリストアップしたが、そこでも Ong の貢献が目につく。

¹⁰² 本稿末尾の「補足資料 3」を参照のこと。

【補足資料 1】ラムス主義自由学芸（三科）改革—主要著作とその変遷—

○著作冒頭の番号はそれぞれ次を意味する：(1) ラムス主義ディアレクティック理論書 (2) ディアレクティック講義（タロンの注釈つき） (3) 反アリストテレス論 (4) ラムス主義方法理論 (5) ラムス主義レトリック理論書 (6) 古典レトリック批判書

○著作末尾の略号：(R)=Ramus 著, (T)=Talon 著, (F)=Fouquelin 著

○出版社名が明記されていない著作は「Paris, André Wechel」から刊行されたもの

	Dialectica / Methodus	Rhetorica	Grammatica
1543 前半	(1) <i>Dialecticae partitiones</i> [Manuscript 6659 BnF] - フランソワ 1 世に献呈 (2) <i>Dialecticae partitiones</i> , Paris, J. Bogard (R) - 上記手稿を増補修正, パリ大学に献呈		
1543 9 月	(1) <i>Dialecticae institutiones</i> , Paris, J. Bogard (R) -3 巻構成: I. <i>natura</i> II. <i>doctrina</i> III. <i>Exercitatio</i> (3) <i>Aristotelicae animadversiones</i> , Paris, J. Bogard (R)		
1545		(5) <i>Institutiones oratoriae</i> , Paris, J. Bogard (T) - タロンによるラテン語レトリック理論書 -3 部構成① <i>natura</i> ② <i>doctrina</i> ③ <i>exercitatio</i>	
1546	(1) <i>Dialecticae commentarii tres auctore Audomaro Taleo</i> , Paris, L. Grandin (T) -1543 年 9 月版 <i>Dialecticae institutiones</i> を手直し - タロンの名を冠するが実質的にラムスの手になるもの [<i>Oratio de studiis philosophiae & eloquentiae conjungendis</i> , Paris, J. Bogard (R) 哲学と雄弁の結合に関する談話]		
1547		(6) <i>Brutinae quaestiones</i> , Paris, J. Bogard (R) ラムスによるキケロ批判	
1548	(3) <i>Animadversionum Aristotelicarum libri viginti</i> , Paris, J. Roigny (R) -1543 年 9 月版 <i>Aristotelicae animadversiones</i> の 4 倍量 (全 473 頁) -20 巻構成, アリストテレスの「オルガノン」全面参照 - 「方法」と「単一性」に関する考察あり	(5) <i>Rhetorica</i> , Paris, M. David (T) -2 部構成① <i>elocutio</i> ② <i>pronuntiatio</i> - 例文は古典古代詩人のもの	
1549		(6) <i>Rhetoricae distinctiones in Quintilianum</i> , Paris, M. David (R) ラムスによるクインティリアヌス批判	
1550	(2) <i>Institutionum dialecticarum libri tres Audomarii Talaei praelectionibus illustrati</i> , Paris, M. David (T) - タロンの注釈つきディアレクティック講義, 1546 年版とは別物		
1554	(1) <i>Institutionum dialecticarum libri tres</i> , Paris, L. Grandin (T) -3 巻構成ディアレクティック理論書の終わり		
1555	(1) <i>Dialectique de Pierre de la Ramée</i> (R) - 初のフランス語版ディアレクティック理論書 -2 巻構成ディアレクティック理論書の始まり ① <i>invention</i> ② <i>jugement</i>	(5) <i>Rhétorique françoise</i> (F) - フークランによるフランス語レトリック理論書 -1548 年 <i>Rhetorica</i> の翻案	

1556	(2) <i>Dialecticae libri duo Audomari Talaei praelectionibus illustrati</i> (T) (3) <i>Animadversionum Aristotelicarum libri XX</i> (R) - 上記 <i>Dialecticae</i> と一緒に刊行 - 3 束, 全 770 頁 ① I-VIII 巻 (328p.) ② IX-X 巻 (271p.) ⇒ 1557 年に <i>Quod sit unica...</i> として単独出版 ③ XI-XVIII 巻 (141p.)		
1557	(4) <i>Quod sit unica doctrinae instituendae methodus : locus e nono Animadversionum</i> (R) - ラムス主義の方法に関する理論書 - 1566 年のタロン注釈つき <i>Dialecticae</i> に組み込まれ大幅修正と再構成, 1569 年にさなる大きな修正	(5) <i>Rhetorica</i> , Lyon, Thibaud Payen (T) 1555 年のフランス語レトリックをタロンがラテン語に翻案 [Ciceronianus (R『キケロ主義者』)]	
1559		[<i>Liber de moribus veterum Gallorum</i> (R) ; <i>Traicté des meurs et façons des anciens Gaulloys</i> 『古代ガリア人の慣習』]	<i>Grammaticae libri quatuor</i> (R) ラテン語の音声学と韻律研究が主
			<i>Rudimenta grammaticae</i> (R)
			<i>Scholae grammaticae</i> (R)
1560			<i>Grammatica graecia, quantenus a Latina differt</i> (R)
			<i>Liber de syntaxi Graeca quatenus a Latina differt</i> (R)
1562	[<i>Prooemium reformandae Parisiensis academiae, ad regem ; Advertissements sur la réformation de l'Université de Paris, au roy</i> (R) 『パリ大学改革に関する緒言』]		<i>Gramere</i> (R) - フランス語によるフランス語文法 - 独自の綴り字法
1565	(1) <i>Dialecticae liber primus, de inventione</i> (R) 1556 年版 <i>Dialecticae</i> の縮刷版, 稀少		
1566	(2) <i>Dialecticae libri duo Audomari Talaei praelectionibus illustrati</i> (T) - 1565 年版 <i>Dialecticae</i> のテキストを使用		
1567		(5) <i>Rhetorica</i> (R) - 二元論的図式化の徹底適用	
1569	[<i>Scholae in liberales artes</i> , Bâle, E. Episcopus (R) ラムスのパーゼル滞在中に刊行, それ以前のラムスの重要テキストを収録] (2) <i>Dialecticae libri duo Audomari Talaei praelectionibus illustrati</i> (T) 上記 <i>Scholae in liberales artes</i> の影響で多数の重要なヴァリエント有 (3) <i>Scholarum dialecticarum libri XX</i> , Bâle, E. Episcopus (R) - 上記 <i>Scholae in liberales artes</i> に収録 - ラムス主義ディアレクティックの方法に従ったアリストテレス論理学著作の分類		
1572	(1) <i>Dialectica libri duo</i> (R ?) - 1569 年ごろの <i>Praelectiones</i> を元にラムスによって書かれたものか?		<i>Grammaire de P. de la Ramée</i> (R) - 1562 年版を大幅修正 - 綴字法を通例のものに戻す - カトリヌ・ド・メディシスへの献辞
1576	(1) <i>Dialectique</i> (en français, 3e édition) (R ?) - 生前ラムスによって準備されていたものか?		

【補足資料 2】

■ 20 世紀以降刊行のラムス（主義）著作の復刻版および校訂版・翻訳版

○復刻版

Petrus RAMUS, *Dialecticae institutiones. Aristotelicae animadversiones*, Stuttgart, Frommann, 1964.

- *Scholae in tres prima libelales artes, recens emendatae per Joan. Piscatorem*, Frankfurt, Minerva, 1965.

- *Scholarum physicarum libri octo in totidem acroamaticos libros Aristotelis, recens emendati per Joannem Piscatorem Argent cum indice accurate*, Frankfurt, Miverva, 1967.

- *De religione christiana libri IV*, Frankfurt 1576, Frankfurt, Minerva, 1969.

- *Scholae in liberales artes*, with an introduction by Walter ONG, Hildesheim, Georg Olim, 1970.

- *Gramere (1562) ; Grammaire (1572) ; Dialectique (1555)*, Genève, Slatkine Reprints, 1972.

Petrus RAMUS, Audomarus TALAEUS, *Collectaneae praefationes, epistolae, orationes*, with an introduction by Walter ONG, Hildesheim, Georg Olim, 1969.

○校訂版・翻訳版

Peter RAMUS, « *Quod sit unica doctrinae instituendae methodus* », translated into English in *Renaissance Philosophy / New Translations*, L. A. KENNEDY (ed), The Hague, Mouton, 1973, pp. 108-155.

- *Peter Ramus's Attack on Cicero: Text and Translation of Ramus's Brutinae Quaestiones*, edited with an introduction by James J. MURPHY; translation by Carole NEWLANDS, Davis, Hermagoras Press, 1992.

- *Arguments in Rhetoric against Quintilian: Translation and Text of Peter Ramus's Rhetoricae distinctiones in Quintilianum (1549)*, translation by Carole NEWLANDS; introduction by James J. MURPHY, Northern Illinois University Press, 1986 [Reprint 2010].

Pierre de LA RAMÉE, *Dialectique (1555)*, édition critique par Michel DASSONVILLE, Genève, Droz, 1964.

- *Dialectique 1555 : un manifeste de la Pléiade*, texte modernisé par Nelly BRUYÈRE, Paris, J. Vrin, 1996.

- *Grammaire (1572)*, édition commentée par Colette DEMAISIÈRE, Paris, H. Champion, 2001.

Antoine FOUQUELIN, *La Rhétorique française (1555)*, in Francis GOYET (éd.), *Traité de poétique et rhétorique de la Renaissance*, Paris, Librairie Générale Française, 1990, pp. 315-428.

【補足資料 3】

■ 邦文研究文献

大城信哉「ミルトン『パラダイス・ロスト』のアルミニウス主義とラムス主義論理学」、『キリスト教学』第44号, 2002年, 65-79頁.

- 「ピューリタン神学とラムス主義—その内的連関の可能性について—」, 『沖縄県立芸術大学紀要』第18号, 2010年, 93-106頁.

小方厚彦『16世紀フランスにおけるフランス語とフランス語観—Ramusの研究—』, 関西大学出版広報部, 1972年.

久保田静香「ラムス主義レトリックとデカルト—近世フランスにおける自由学芸改革の一側面—」, 『エ

クフラシス—ヨーロッパ文化研究—』第4号, 早稲田大学ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所, 2014年, 60-77頁.

桑木野幸司『叡智の建築家—記憶のロクスとしての16-17世紀の庭園, 劇場, 都市—』, 中央公論美術出版, 2013年, 289-402頁.

- 「記憶術と叡智の家—ルネサンスの黄昏における伝統の変容—」, ヒロ・ヒライ, 小澤実編著『知のミクロコスモス—中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー—』, 中央公論新社, 2014年, 42-68頁.

佐々木力『科学革命の歴史構造 上』, 講談社学術文庫, 1995年 [初版1985年, 岩波書店], 152-183頁.

月村辰雄「16世紀フランスの学芸の世界」, 樺山紘一他編『ノストラダムスとルネサンス』, 岩波書店, 2000年, 75-98頁.

辻裕子「ミルトンと『ラムス論理学教程』—その背景と特質—」, 『同志社女子大学学術研究年報』第49巻, 1998年, 137-161頁.

中野和光「ラムス Ramus, Petrus の「方法」概念に関する一考察」, 『福岡教育大学紀要』第43号, 第4分冊, 1994年, 115-127頁.

- 「ラムス (Peter Ramus) によるクインティリアヌス批判と現代修辞学の比較」, 『九州教育学会研究紀要』第26号, 1998年, 47-53頁.

前田達郎「レトリックと方法—F. ベーコンの二つの顔—」『新岩波講座 哲学15』, 1985年, 63-98頁.